

授業「保育内容演習 (環境)」に関する一考察

氏原 陽子

Discussion on Exercises in Childhood Education (Childhood Environment)

Yoko UJIHARA

1. 問題意識

保育士養成に関わる授業科目として、「保育内容演習 (環境)」がある。筆者は、2010年度、2011年度、「保育内容 (環境)」¹⁾を2名によるオムニバス形式で担当し、2012年度からは当該科目を1名で担当している。「保育内容演習 (環境)」は2年生前期に開講しており、受講生数は40名から50名である。

「保育内容演習 (環境)」は、「保育内容演習 (表現) I」「保育内容演習 (表現) II」「保育内容演習 (言葉)」「保育内容演習 (健康)」「保育内容演習 (人間関係)」とともに、幼稚園教育要領、保育所保育指針で示される5領域を受けた授業科目であり²⁾、学生が最初に学ぶ領域に関わる授業科目である。

本稿は、「保育内容演習 (環境)」の制度的背景である領域「環境」のねらい、内容を踏まえて、授業「保育内容演習 (環境)」をどのように計画し実践してきたのか、学生が授業のねらいである体験を通して、何を学んだのか明らかにし、今後の授業計画に資することを目的とする。

2. 領域「環境」とは

幼稚園教育要領、保育所保育指針では子どもが身に付けることが期待される心情、意欲、態度などの「ねらい」、「ねらい」を達成するために保育者が指導する事項、子どもが環境に関わって経験する事項を、子どもの心身の発達の視点から、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5領域にまとめている。

1) 5領域の総合的保育

領域は小学校以降の教科とは異なり、子どもの生活や遊びを通して総合的に展開されるものである。吉田 (2010) はこのことをわかりやすく図示している。幼児期の教育は、子どもが自ら周囲の環境に働きかけ、主体的自主的に様々な活動に取り組みながら、自らの発達に必要なものを獲得しようとする。この活動は、子どもを取り巻く環境全体が子どもの生活の中で総合的にかかわりながら深まっていく。その背景には、幼児期がエリクソンの発達段階によると、「自律」(2~3歳)と「自発性」(4~5歳)を獲得する時期であることと大きく関係している。

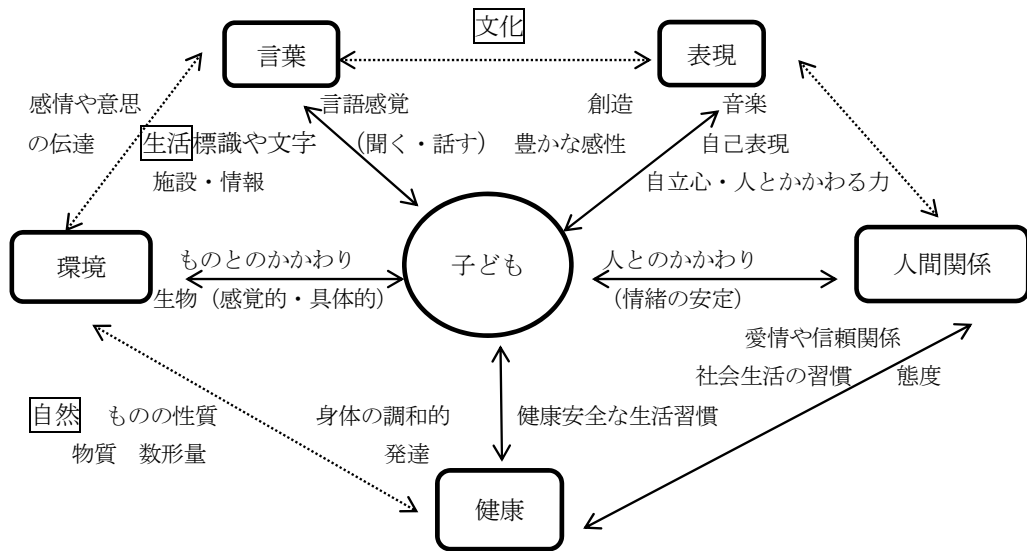


図1 子どもを取り巻く環境と5領域の総合的保育 (吉田, 2010, 11頁)

2) 領域「環境」の位置づけ

領域「環境」の嚆矢となったのは、1956 (昭和31) 年の幼稚園教育要領の領域「自然」「社会」である³⁾。自然での望ましい経験として、「身近にあるものを見たり聞いたりする。」「動物や植物の世話をする。」「身近な自然の変化や美しさに気づく。」「いろいろなものを集めて遊ぶ。」「機械や道具を見る。」と、見る・聞くといった感覚を使う経験が最初に位置づけられ、「戦後の保育要領で奨励された昆虫採集、採集した生き物の飼育等」(濱田, 2010) を受けた「動物や植物の世話をする」が次に位置付けられている。社会での望ましい経験として、「自分でできることは自分でする。」「仕事をする。」「きまりを守る。」「物をたいせつに使う。」「友だちと仲よくしたり、協力したりする。」「人々のために働く身近の人々を知り、親しみや感謝の気持ちをもつ。」「身近にある道具や機械を見る。」「幼稚園や家庭や近隣で行われる行事に、興味や関心をもつ。」と、身近な物を見ること、物を大切に使うこと、行事への興味や関心が挙げられている。

2008年、幼稚園教育要領、保育所保育指針は初めて同年度に改訂された。領域「環境」は、幼稚園教育要領、保育所保育指針ともに、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」とされ、「①身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」「②身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。」「③身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」の3つのねらいが置かれている⁴⁾。

それまでの内容と特に大きく変化したのは保育所保育指針である。1999年保育所保育指針では、第7章から第10章まで3歳児以降の年齢別保育の内容が示され、「4内容」の下に5領域の内容が記されている。そのため、領域「環境」の内容も年齢によって異なる。その前に示される「3ねらい」も、年齢別の5領域のねらいとは別に、「生命の保持と情緒の安定を図る」など養護的な側面のもが含まれている。

2008年の領域「環境」の内容は以下のとおりである。

表1 領域「環境」の内容

幼稚園教育要領	保育所保育指針
	①安心できる人的及び物的環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。
	②好きな玩具や遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ。
①自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。	③自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
②生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。	④生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。
③季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。	⑤季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
④自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。	⑥自然などの身近な事象に関心を持ち、遊びや生活に取り入れようとする。
⑤身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。	⑦身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く。
⑥身近な物を大切にする。	⑧身近な物を大切にする。
⑦身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。	⑨身近な物や遊具に興味を持って関わり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
⑧日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。	⑩日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ。
⑨日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。	⑪日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心を持つ。
⑩生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。	⑫近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する。
⑪幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。	

保育所保育指針において、保育の内容が一つの章にまとめられたことで、幼稚園教育要領11項目のうち、9項目が保育所保育指針と一致している。保育所保育指針では、①に五感の働きを豊かにすることが書かれているが、それは乳児を預かる施設であることによる。幼稚園においても、内容①に関連して、「全身で自然を感じる体験」（幼稚園教育要領解説）が重視されるように、五感を使った体験は重視されている。⑪の国旗への親しみ、それによる将来の国民としての情操や意識の芽生えは保育所保育指針ではみられず、⑩に含まれる地域への興味や関心、⑪行事への参加が⑫に位置づけられている。

3. 「保育内容演習（環境）」の授業づくり

先に概観したように、領域「環境」は、子どもが自然、もの、数量や図形、文字、地域や社

会とかかわることで、子どもがそれらに興味・関心をもち、遊びに取り入れることをねらいとしている。幼稚園教育要領では11項目の内容のうち4項目、保育所保育指針では12項目の内容のうち4項目が自然や季節と関連するものとの関わりになっており、季節を自然に含めると、自然との関わりを重視した内容となっている。

子どもが自然、もの、数量や図形、文字、地域や社会とかかわるためには、好奇心が鍵となる。人間の好奇心は犬やサル、類人猿など、他の動物とは比較にならないほど大きく、自分の能力をためし、大きくしたいという発達への動機が含まれている(田嶋, 1997)。

1) 五感を通しての学び

子どもは体全体で感じる事が多く、見たり、聞いたり、触ったり、臭いをかいだり、味わったりしたこと、すなわち、五感を通して行動したことが好奇心につながる。そのために、子どもが自らかかわってみたいと思うような魅力ある環境が身近にあることが大切である(高橋, 2009)。幼稚園教育要領では、領域「環境」の内容の取扱いに関して、「幼児期において自然のもつ意味は大き」として、「自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われること」が述べられている。

子どもが自然と関わる機会が減少していることが指摘されている。学年が上がるにつれ、その傾向は高まる。夏秋と有働が1997年に実施した調査によると、遊びの内容として、「自然のもの」は4歳児50.6%をトップに、小学1年生35.4%、4年生10.1%、「虫取り・花摘み」は4歳児51.1%をトップに、小学1年生38.8%、4年生17.3%と激減する。保育士を志望する学生も日常生活のなかで、自然と関わる機会は少ないと考えられるため、五感を使った自然との関わりができるように授業を計画した。

表2 2013年度「保育内容演習(環境)」のシラバスの一部

授業の目的と概要	自然・季節や社会、物にかかわる実習及び講義を通して、幼児の「環境とかかわる力」を育てる保育者としての資質を養うことを目的とする。 領域「環境」が自然、物、社会という環境と幼児がかかわることをねらいとしていることを理解し、受講者自身がそれらに関心をもち、かかわることができるような実習を行う。自然では植物、風、石、季節では七夕、物ではおもちや、素材、社会では地域の史跡、施設を扱うとともに、年中行事を解説する。
授業の到達目標	1. 領域「環境」の位置づけ、ねらい、内容を理解できる。 2. 自然に関心をもち、積極的に関わったり、探究したりして、保育に活用できる。 3. 物的環境に関心をもち、物に関わる楽しさ、使用する際の危険を認識できる。 4. 地域の史跡、施設を知り、地域マップを作成することができる。 5. 模擬実践七夕会を計画し、実践することができる。
授業計画	1. 保育の基本と領域「環境」 2. 春の自然 3. 植物にかかわる保育～色水・香水やさん・草木の展覧会 4. 風とかかわる保育～風をつくる・袋凧・風車

	<ol style="list-style-type: none"> 5. 石とかかわる保育～ストーンアート 6. 地域を生かした保育 7. 地域の史跡、施設 8. 行事～七夕会準備 9.七夕会グループ発表1 10. 七夕会グループ発表2 11. 七夕会グループ発表3 12. 七夕会振り返り 13. 年中行事（1）春～夏 14. 年中行事（2）秋～冬 15. 物とかかわる保育
成績評価基準	小レポート40%、模擬実践30%、小テスト30%

2013年度は、15回の授業のうち、植物を用いた色水、香水づくり、草木の展覧会⁵⁾（第3回）、袋凧、こいのぼりづくり（第4回）、ストーンアート（第5回）と、3回の授業を自然との関わりにあてた。順に説明すると、植物を用いた色水、香水づくり、草木の展覧会では香水づくりでにおいを感じることに、袋凧、こいのぼりづくり⁶⁾では体全体で風を感じることに、ストーンアートでは石の表面を手で感じることに、見るだけでなく、触れること、嗅ぐことを体験できるようにした。また、じっくり見ることを体験できるように、アリの生態を描いた科学ビデオの視聴（第2回）、大学付近の寺社、城址見学（第7回）を計画した。大学付近の寺社、城址見学は地域（社会）との関わりを感じさせることを重視した。

2) 理科的・社会的知識の習得、模擬保育実践との関連

2つめに力を入れたのは、初歩的な理科的・社会的知識を習得することである。子どもが「なぜ?」「これは何?」と疑問に思ったとき、保育者がどのように関わるかが保育の質の分かれ目となる。子どもの疑問に対して、保育者がさらに次の段階へと発展していく援助や知的な刺激を投げかけることで、子どもの豊かな学びを保障することができる。三宅（2010）も、すべてのことに認識をもつことは不可能であると断りながらも、保育の種々の活動に必要な基礎的な知識の欠如は致命的であると断ずる。初歩的な科学的・社会的知識の習得はいずれも、前者で述べた感覚を使った体験と関連づけた。

3つめに力を入れたのは、保育者としての実践力の向上である。領域「環境」の内容には、先に記したように、季節による人間の生活の変化への気づき、行事への参加がある。そこで、年中行事の一つとして七夕会を取り上げ、5歳児を想定した30分間の部分実習計画・実践する機会を設けた。

3) 成績評価

以上述べたような授業を計画したため、成績評価基準は小レポート40%、模擬実践30%、小テスト30%とした。小レポートは、毎回の授業のコメントシート、ビデオを視聴した感想文、模擬部分実習のコメントシートを総合的に評価した。模擬部分実践は、ねらいが明確であったか、ねらいに沿った内容であったか、5歳児が取り組める内容か、内容の説明はわかりやすかったか、楽しむことができたか、保育者役や友達とのコミュニケーションが深まったかという観

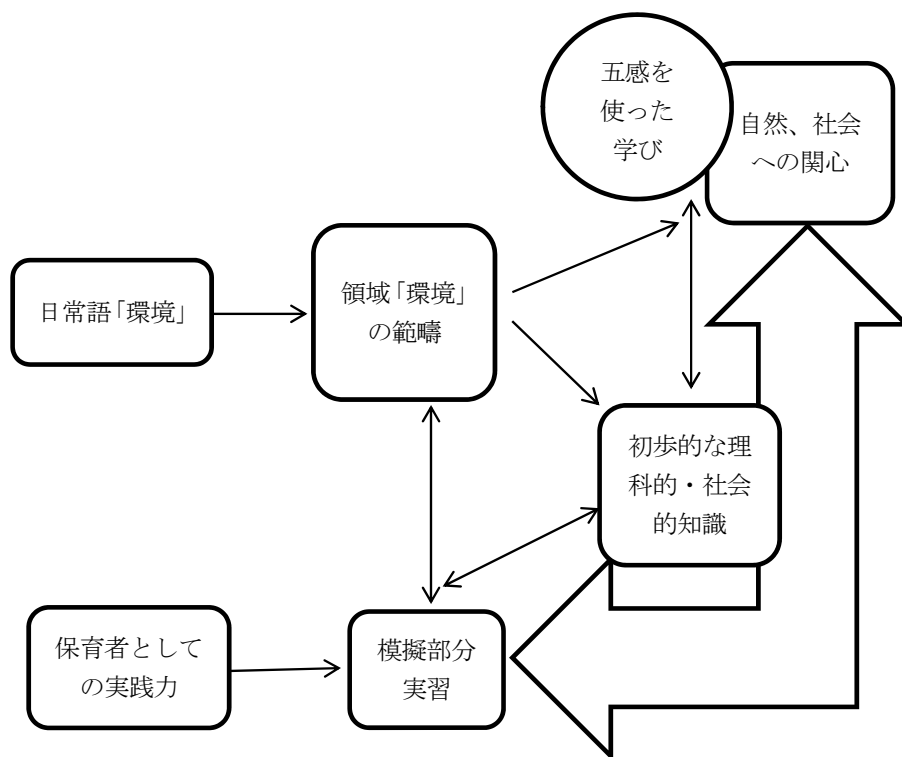


図2 保育内容演習（環境）における関連

点から評価した。小テストは、授業で扱った初歩的な科学的・社会的知識の習得を確認できるように、範囲を区切って3回に分けて実施した。

4. 学生の体験と学び

授業では、A4用紙に15回分のコメントを記入する枠（縦4.2cm、横5.5cm）を作ったコメントシートで、学んだことに関して感想や考えたこと、質問等を書かせている。小レポート、模擬部分実習の評価シートを課した授業を除く11回分の授業で、コメントシートへの記入を求めた。ここでは、授業のねらいである体験を通して、学生が何を学んだのか明らかにするため、第3回、第4回、第5回、第7回の4回分のコメントシートを言説分析の手法で分析する。コメントシートを分析の対象とする意義は、短時間に短い文章で表現することが求められるところにある⁷⁾。

1) 言説分析とは

井口(2003)によると、「言説」とは簡単に言うと、あるトピックについての「お話」を指す。「お話」は社会的、文化的に制限されたものである。第一に、言説にはトピックがある。井口は合衆国中学生の日本に関する言説分析をもとに、「日本」という話題が「戦争」「生産・経済」「教育・学校」などのサブ・トピックに分かれること、さらに戦争というトピックが「パール・ハーバー」「日米友好」「ヒロシマ」といったサブ・トピックに分かれることを述べる。第二に、言説には、言葉が語られる立場がある。多くの場合、文章の主語になっている言葉が言説を語っ

ているのが誰であることを示唆する。第三に、言説には価値判断がつきまってくる、すなわち、イデオロギーを含んでいる。第四に、言説にはそれを特徴づける語彙や言葉の使い方がある。これら四つの点を考慮に入れた分析が言説分析である。

2) コメントシートの考察

コメントシートから、次のようなトピック及びサブ・トピックが浮かび上がる。

表3 学生のコメントシートからみたトピック

<p>色水→色がでる/でない→色がやすい花とでにくい花、発見 想像しなかった色→生命のすごさ 油、色を交換 失敗→友達の色水 花を選ぶ</p> <p>色水を画用紙に描く→色→薄さ→チャレンジ、時間が経つと色が出る 変化 色がつくものとつかないもの</p> <p>香水→におい、香り、香りが出ない、香りの違い 色、色水 蜜</p> <p>草木の展覧会→花→春 花畑 作品→花の種類があると面白そう、女子が好き、豊かな感情 プレゼント</p> <p>花/植物→身近にある花の多さ/少なさ、花を摘む・見ることの新鮮さ、花との関わりの久しぶりさ、 花が咲いていることへの気づき、花のつくり、落葉樹</p> <p>体験→手軽さ/時間が必要、かわいさ、楽しさ、花が使えることへの気づき、やってみないとわからないこと、思い通りにならないことの面白さ、子どもの頃に戻った気持ち、花をさわる・分解 →発見、気持ち悪さ</p> <p>保育→子どもにとって良い機会、子どもとやるときの注意点</p>
<p>こいのぼり作り→大変/簡単、仲間の協力、面白さ、かわいさ、カラフルさ、キレイ、楽しさ、個性的、 時間不足、材料、子どもが喜ぶ</p> <p>こいのぼりで遊ぶ→こどもの日/行事</p> <p>風→走る/走る/空気→風</p> <p>袋風作り→簡単/手軽→小さな子 軽い→高く飛ばせる</p> <p>楽しい→保育</p> <p>風→種類、向き、特徴、生物と風との関係 パワー/力 遊ぶ楽しさ</p> <p>保育→持ちネタを増やす、保育園等でするときの工夫 楽しさ→自然を使った遊び、協力して作成すること</p>

<p>石→種類、色、多様性、特性、大小、質感の違い、模様の違い ルーペ→細かい粒 形→想像→描く 手触り→絵の具との相性 音を鳴らす ストーンアート→絵の具⁸⁾の水量、描く楽しさ/難しさ、絵の具が乾く時間 絵の具の色と石に塗った色の違い→子どもにとって発見 石で遊べる、皆で作る面白さ 保育→園では新聞紙を敷いてやる、服 子どもにも簡単、自然のもので遊ぶ楽しさ</p>
<p>大学周辺の発見 道→バスからみる道と歩いて通る道、道の長さ/長さ、いろいろなルート、坂 歩く→疲れ/楽しさ、気持ちよさ、すっきりした気分、歌「さんぽ」 運動 靴→ヒールの靴と運動靴 天候→暑さ/心地よさ、良さ、風 文化施設(寺・神社・城址)→日影の気持ちよさ/涼しさ、自然、歴史的関心、祀られている人物、 像、じっくり見ることの新鮮さ、美しさ、光景、広さ/狭さ、地域の人と文化施設との関わり、 地元の文化遺産 日本の文化、伝統 地図づくり→歩くことと地図を書くことの違い 班→人数、協力、グループワーク→参加意識 地域の歴史を知る学年 交通→下見、交通ルール 保育→散歩→散歩する際の留意点 虫、花、草と触れ合う、友達と協力、発見</p>

→より右はサブ・トピック

色水、香水づくりでは色やにおい、香り、こいのほりで遊ぶでは風を感じることに空気の流れるが結びつく、風の力、パワーを感じる、石では石をルーペでじっくり観察する、形を見て想像する、触る、質感を感じる、音を鳴らす、地域の史跡見学では歴史的関心や地元の文化遺産への関心、クイズ形式の課題を出したため、寺社、城址をじっくり見ることに、内部の様子や像、祀られている人物、神社での日影の気持ちよさ/涼しさなど五感や体を使った体験がサブ・トピックとして挙がる。トピックとして保育について書く学生もおり、子どもと一緒にやる時はどのような点に注意すればよいのか、書かれている。

見るという視覚はよく使われる感覚であるため、香水、石のトピックについて、視覚以外の五感が使われているコメントシートの例を挙げる⁹⁾。

「香水屋さんでは、ラベンダーをいれたのでイヤシの香りになりました。ただの水と花なのがいい香りがするなんて嬉しかったです。」

「香水作りは、コーラ(ペットボトル)のにおいが強すぎて花に香りがでませんでした。でも色はキレイでした。」

「パンジーで香水をしたが、土っぽいにおいしかせず、ミントの人が一番においが出ていた。」

「香水は、アップルミントとバラがとても良いにおいでした。」

「香水は香りが強そうな花を使ったけれど、あまり香りがしませんでした。」

「香水は、花のニオイというより、どちらかという草っぽいニオイがしました。花びらだけを使った方が花のニオイがよくでたのかな？と感ずることができました。」

「実際に石の標本を見たり触ったりしてみて初めて手にする石も多く新鮮だった。泥岩がすごく軽くてびっくりだった。」

「泥岩がとても軽かった。手にもついたりした。水にひたせばまた泥になるのだろうか。」

「久しぶりに石の勉強をして石のおもしろさを知った。石を触ったらそれぞれ手触り等がちがっていた。」

「石にもつるつるとごつごつがある。」

「ざらざらとしている石だと絵の具は描きにくかったです。」

「石にはたくさんの種類があるがだいたい落ちていた物は同じだった。鳴らすと音は変わらなかった。色を簡単にぬることができ、とてもキレイになった。さわった感じはつるつるしていた。」

「ストーンアートは石の形、質感によって描き方を考えなければならなかった。」

「私」という語彙は用いられない。香水の3番目のコメントシート例にみられるように、「私」と他の受講生「ミントの人」とは区別される。そのため、個々の学生が経験した体験と他の学生が経験した体験とは切り離される。香水のコメントシート、「ラベンダーをいれたので」「パンジーで香水をしたが」「香りが強そうな花を使ったけれど」にみられるように、良い香りが出ると予想される花を持ってくる学生もいる。予想どおりの香りが出る学生もいれば出ない学生もいる。そのような体験を通して、学生は自然の不思議さを楽しんだり、生命への畏敬の念を感じたりしている。「草っぽいニオイ」がした学生も「花びらだけを使った方が花のニオイがよくでた」ことを学ぶ。

石のコメントシートでは、「初めて手にする」「手にもついたりした」「手触り」と身体で感じたことを強調する「手」という語彙が使われている。手で触った感じである「ごつごつ」「ざらざら」「つるつる」などの語彙もみられる。

言葉が語られる立場では、香水では「香水」を主語にするコメントシートがみられ、自らが体験して作った香水のにおいや香りを感じる自分という物語になっている。石では主語を使う文章が少ない中、泥岩の軽さについては、「泥岩が」と明記され、驚きやその性質に対する想像につながっている。

価値判断については、価値判断をみてとることは難しいものの、香水の「アップルミントとバラがとても良いにおいでした。」には、「自然と遊ぶときは、いくつかの種類の植物を準備するとよい。」とする価値判断、良い香りが出ると予想される花を持ってくる学生にみられるように、「うまく作らなければならない」とする価値判断がみられた。

レイチェル・カールソン (R. Carlson, 1956) は自然の神秘さや不思議さに目を見張る感性を「センス・オブ・ワンダー」と名付け、センス・オブ・ワンダーを新鮮に保つために、われわれが住んでいる世界の喜び、感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人がそばにいてくれることが必要であると論じる。保育の場面では、保育者がこのような大人でなければならない。そのためにも、学生が心を揺さぶられる体験をすることが大切である。体験とは具体的に体で感じることであり、体験からの学びを総括して一般化すること

で、体験が経験になる (田宮, 2011)。

5. 結論

五感を使った体験と初歩的な理科的・社会科的知識と関連させる授業を計画し、実践してきたが、五感を使った体験と理科的・社会科的知識を関連させる学生もみられる一方、体験を楽しむ学生もみられる。体験を楽しむ学生のなかには、保育について考える学生、ねらいとした感覚とは別の感覚を感じるにつながらる学生、別の場所での体験への関心を高める学生もあり、新たな学びを生じさせる可能性がみられる。しかし、それらとはつながらず、体験をただ楽しむ学生、体験に不満を持つ学生もみられる。自らのする体験は限られているなかで、他の受講生のする体験は自らのする体験とは切り離され、学ぶものとはみなされない。うまく作ることを念頭にし、結果的に失敗して学ぶことはあり得るものの、失敗する危険を冒すことを避けようとする¹⁰⁾。

そのため、今後の授業に向けて、理科的・社会的知識を包含した体験を経験させること、他の受講生の体験や失敗からどのように学ぶのか助言すること、保育士養成用に刊行されている領域「環境」の教科書に掲載される事例を検討させて、子どもが体験を通して学ぶために保育者がどのような援助をしているのか知ること、そこで知ったことを自らの体験と結びつけることに力点を置いて、授業を計画・実践したい。そして、授業のねらい、内容に即して、学生がどのように学ぶことができたのか、コメントシートだけでなく小レポートを分析して評価したい。

- 1) 2012年度にカリキュラム変更があり、通年科目の「保育内容 (環境)」から半期科目の「保育内容演習 (環境)」になった。
- 2) その他5領域を関連させる科目として、「保育内容演習 (遊びと文化)」がある。
- 3) 「幼児の発達上の特徴を考え、目標に照して、適切な経験を選ぶ必要がある。」として、幼児の教育的経験が健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作の6領域に分類された。保育所保育指針は1965 (昭和40) 年に制定され、「望ましいおもな活動」として、4・5・6歳に、健康、社会、言語、自然、音楽、造形が位置付けられた。民秋 (2008)、横井 (2010) を参照のこと。
- 4) 保育所保育指針では一部の文字が漢字になっている。引用の表記は幼稚園教育要領に合わせた。
- 5) 木村が5歳児の保育事例として紹介する「野草で絵を描く」を体験する内容である。事例では、園内で自分の摘みたい草がなくなり、園外散歩に出かけたいという幼児の声にこたえて出かけ、幼児が草を張りつけたり、草に絵を加えて描いたりしている (詳細は木村 (2010) を参照のこと)。授業では持参する草木を限定していないため、花壇の植物を持参する学生が多い。
- 6) 春の年中行事である端午の節句に関連して、『保育とカリキュラム』2013年5月号に掲載された、にじみ絵うろこのこいのぼりを製作した。作り方は以下のとおり。カラービニール袋3枚を用いて、こいのぼりの体を作り、口になる部分を厚紙で補強し、水性マジックでコーヒーフィルターに絵を描き、霧吹きでにじませ、両面テープで、うろこに見立てて体に貼りつける (詳細は村田 (2013) を参照のこと)。
- 7) 第1回の授業で、コメントシートの記入内容が小レポートの成績評価に含まれることを伝

えている。

- 8) 正式にはアクリル絵の具を指す。言説分析では先に述べたように、どのような語彙を使うかが重要になるため、学生が用いた語彙で表記した。
- 9) それぞれのトピックについて書かれている部分を引用した。
- 10) 筆者は失敗から学べるのが学生時代であると伝えている。

参考文献

- Carlson,R., 1956, 上遠恵子訳『センス・オブ・ワンダー』新潮社, 1996。
- 濱田彩希, 2009, 「領域『環境』の変遷」柴崎正行編著『演習 保育内容 環境』建帛社, pp.99-107。
- 井口博充, 2003, 『情報・メディア・教育の社会学—カルチュラル・スタディーズしてみませんか?』東信堂。
- 木村美知代, 2010, 「5歳児の保育活動」吉田淳・横井一之編『保育実践を支える 環境』福村出版, pp.119-132。
- 村田夕紀監修, 2013, 「作る楽しさがいっぱい! こいのぼり」『月刊保育とカリキュラム』第62巻, 第4号, pp.10-15。
- 夏秋英房・有働く玲子, 1997, 「子どもの遊びの変化とその要因についての一考察—『子どもの遊びと生活』調査の基礎集計をもとにして」『聖徳大学研究紀要 短期大学部』第30号, pp.107-113。
- 高橋昇, 2009, 「領域『環境』と保育の実際」柴崎正行・岩月芳弘編『保育内容「環境」』ミネルヴァ書房, pp.69-88。
- 田嶋一, 1997, 「教育とは何か」田嶋一他『やさしい教育原理〔新版増訂版〕』有斐閣, pp.1-38。
- 民秋言, 2008, 『幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷—教育要領・保育指針新旧対照表付き』萌文書林。
- 田宮緑, 2011, 『領域「環境」』萌文書林。
- 横井一之, 2010, 「領域『環境』のねらいと内容」吉田淳・横井一之編著『保育実践を支える 環境』福村出版, pp.155-172。
- 吉田淳, 2010, 「保育における環境の役割」吉田淳・横井一之編著前掲書, pp.9-18。

